

理事長就任のご挨拶

わたしは北海道新聞の記者を40年近く勤め、昨年夏、グループ会社である道新文化事業社の代表取締役社長を最後に退任しました。

その間、ジャーナリスト留学と道新パリ特派員を含め計5年間、家族と共にパリで暮らしました。これがわたしとフランスとの出会いであり、札幌日仏協会がフランス革命から200年を機に1989年に発足して以来、協会の活動にも携わってきました。

今回、北大の深瀬忠一先生にはじまり、大平具彦先生、そして小樽商大の江口修先生と引き継がれてきた札幌日仏協会の4代目の理事長をお引き受けしました。フランス法、フランス文学を極めた3人の先生方に比べ、浅学の身であることは明らかですが、フランスに寄せる思いは劣らぬものと自負しております。

会員の皆様も、何らかの縁でフランスと出会い、強い関心を寄せて頂いていることでしょう。わたしは、こうしたフランスとの不思議な繋がりを大切にしたいと思います。ご承知の通り、無数に存在する国の中で、フランスだけに「お」が付けられることがあります。「おフランス」はあるけれど、「おアメリカ」も「おドイツ」も存在しない。100年前、詩人の萩原朔太郎が「ふらんすへ行きたしと思えども、ふらんすはあまりに遠し」と歌って以来、フランスは日本人の西洋へのあこがれをかきたてる、特別な国であり続けてきました。それがときに、「おフランス」という揶揄の表現に転化するわけです。

現在、コロナ禍で多くの活動が停止を余儀なくされておりますが、今後、皆様と手を携えて、こうした「おフランス」の魅力に触れ、フランスと北海道を結ぶさまざまな活動を繰り広げていきたいと思っております。2024年にはパリ五輪が開催され、再びフランスに脚光が集まるでしょう。この機を生かし、フランスファンを発掘し、減少傾向にある会員の拡大に向け、組織を強化していきたいと思っております。そのためには、皆様の協力が欠かせません。

今回、就任された小高咲会長は経済界に精通されております。お力添えを頂きながら、理事長として全力を尽くしてまいります。どうぞよろしく願いいたします。

En tant que président du conseil de la Société Franco-Japonaise / Alliance Française de Sapporo, je vous promets de faire tous mes efforts pour réanimer nos activités. Je vous remercie.

加藤利器